

老舍研究会会報 第6号

胡絮青女士 題字

北京土産話

柴垣芳太郎

大学祭の期間を利用し、10月27日から11月5日まで、北京を訪問した。北京の秋は初めてで、期待して行ったが、到着時すでに最高10度、最低0度、着用していった服装では風邪をひくからと、廻りの人の勧めで、羽毛入りのブルゾンを買って寒さをしのいだほどだ。でも、後半は好天が続き、寒さはさほどでもなく、しのぎやすかった。

今回訪中の目的は、老舍資料のコピーを図書館から受け取ることであったが、さすがに北京は老舍研究の中心地、最新のニュースを見聞してきたので、そのあらましを報告する。

第1、蘇叔陽の《太平湖》。昨年、東京で彼に会った折、舒乙《父亲最后的两天》を読んで胸を打たれ、これを脚本にして上演したいとの熱辯を聞いて、大いに期待していた。出発前、光明日報に載った《太平湖》を読んで、北京での反響はと強い関心をもって行ったところ、果して、北京人民芸術劇院による3月公演に決まり、来年から始まる芸術祭に、人芸の参加作品になるとのことであった。

監督には、若手ナンバーワンの林兆華が決定したが、出演者は未確定で、老舍に扮する主役は特に希望者が多く、調整中(于是之が最有力)とのことである。舒乙氏の観測では、恐らくロングランになろうとの予想であった。

その台本は、《新剧本》5期(9月)発表分が第6稿、《光明日报》(8月24日~9月18日)が第8稿、《新华文摘》(11月)の第9稿が上演本になるそうである。

第2、舒乙《老舍》(人民出版社、8月)を出発前、幽州書屋から郵送してもらい、周囲の人から購入して来るよう依頼されていたのに、北京の書店のどこにも見当たらない。舒乙氏に質したところ、コンピュータによる排版で、間違いが多過ぎるため回収され、再び人の手で活字を拾っている最中だそうで、恐らく出版はかなり遅れそうである。

180頁に亘って、老舍の一生が詳しくまとめられ、中には新しい発見もかなり盛り込まれていて、大変参考になるのに、出版が遅れて残念である。

胡絮青・舒乙編《散記老舍》(北京十月文艺出版社、5月)は、幽州書屋では品切れであったが、王府井の新華書店で発見、数冊購入できた。お二人の既発表分56篇を集めたものだが、中に数篇、初見のものも含まれている。

第3、《老舍文集》は、当初第15巻を予定していたのが、第16巻までと増巻に変更になったそうである。第10巻から第13巻までが戯曲、第14巻~第16巻は詩歌・散文・雑文・論文・曲芸・書信が収められ、今後毎年2冊発行予定とのこと。

その発行元の人民文学出版社と香港三联書店との共催で、1987年4月に香港で《老舍生活歷程展覽会》が挙行されることになっていて、舒济氏は目下その準備に追われているとのこと。その話の後で、香港で開催後引き続き日本で開催できたらと言われたが、残念ながら、現状では無理だろうと返事しておいた。

第4、《燕都》誌上にかねて連載されていた李翠耕《老舍在北京的足跡》(北京燕山出版社、8月)が、数多くの写真を添えて一本にまとめられた。五十枚近い写真の中には、老舍夫妻の結婚記念写真等の複製が若干ある以外は、今回

新しく専門家によって撮影された写真集で、資料として役立つものばかりである。

尚、この書をもとに、北京テレビ局による放映がきまり、目下準備中とのことであった。

第5、舒家の墓地は、前記の《足跡》の写真集の第5頁に《舒乙在舒家墓地留影》とある場所であるが、3月討論会の見学の際は車上から説明を聞いただけであった。

友協の歓迎会の席上、舒乙氏がこの件に触れ、数日前前記テレビ撮影打合せのため現地を訪れた折、偶々来あわせた侯宝山氏（54才、列車長）と言葉をかわしたところ、《四世同堂》の常二爺はこの人の叔父がモデルであることが判明したと披露、私にも行ってみないかと誘いがあったので、次の日に出かけることになった。これを聞いた舒済さんも同行することになり、翌30日、3人で大鐘寺の東南にある舒家の墓地へ向う。

三環路を真西に走り、京包線の立体橋の手前体育学院の前で南進し、住宅群の間を縫うように走ることで十分程、と突然思いがけない所に墓が出現する。車を下りて、かなり広い白菜畑を線路沿いまで歩いた所が舒家の墓地の跡であった。写真で見る通り、何のそれらしいおもかげもなく、関係者の確認がなければそのまま消失

してしまったことであろう。

写真をとった後引返し、下車した所に昔からの部落があり、その中の一軒の侯宝山氏（明光寺44号）宅を訪問。この日も運よく氏は非番で在宅、早速いろいろと話を聞くことができた。

侯氏は、1949年、老舎と兄の二人が、この地の墓詣りに来た時のことを、はっきりと記憶していた。背の高い兄は中国風の服装であったが、背の低い弟は、オーバーを着、革靴をはき、ステッキをつき、眼鏡をかけていた。その1949年という年は、老舎が北京に十数年ぶりに、しかもアメリカから帰ったばかりの時のことで、その服装はさもありなんと思われる。それに、母が老舎の不在中に亡くなり、その初めての墓参ということになるわけだ。

そのお墓には、老舎の父舒永勝が納められ、後に、日中戦争中に母の馬氏が亡くなり、その葬儀の折、幼い舒済・舒乙の両氏も母に従ってこの地を訪れたことがあったのか、この発見に運った。

僅か十日間の滞在であったが、さすが老舎と最も縁の深い北京、やはり会として北京駐在大使（舒乙氏の言葉）が必要で、その役を布施直子会員にお願いしてきた。



(上) 舒家の墓地にて



(右) 侯宝山氏らと

「茶館」舞台上演の言語

岡部 謙治

北京人民藝術劇院が1979年2月17日に北京首都劇場において上演した折の全幕完全実況録音のテープを入手した。これを共同作業で全幕、ローマ字におこした。このうち第一幕は、「老舍『茶館』舞台上演録音テープの“拼音文字”化資料(附・簡体字)ーその1ー」として発表した。(「大東文化大学語学教育研究論叢」第3号、昭和61年3月)第二幕・第三幕も引き続き活字化される予定である。

さて、このローマ字おこしの作業を終え、「《茶館》的舞台艺术」の漢字で書かれたものと比較してみると、単語、句、文それぞれにわたって、音声上、語彙上の異同が数多くみられる。

兒化、輕声、声調の単語自身の或いは文中における変調、文末語気助詞の音変、普通話と北京方言との比較等、今後研究すべき材料がたくさん得られた。

この中から、今回は特に、

- I “AA兒” 単音節動詞の重疊プラス兒化尾音(坐坐兒・等等兒)
- II “ABAB兒” 二音節動詞の重疊プラス兒化尾音(活动活动兒)
- III “AA兒” 単音節形容詞の重疊プラス兒化尾音(远远兒)
- IV “AA兒” 単音節副詞の重疊プラス兒化尾音(真真兒)

について紹介したい。

以下、「《茶館》的舞台艺术」(北京人民藝術劇院《艺术研究資料》編輯組編、1980年7月第1版)との比較でみていくが、上段はローマ字でおこした音声の漢字化であり、下段の(艺)は「《茶館》的舞台艺术」の意であり、p、lはこのテキストの頁数と行数である。

I AA兒(単音節動詞の重疊プラス兒化尾音)

1. zuòzuor 坐坐兒

王利发: 二爷, 您这儿坐坐兒, 我給您沏碗小叶

儿茶喝ノ

(艺): 您坐下, 我給您沏碗小叶茶喝ノ(P55、l21)

王利发: 您坐坐兒, 有您在我这儿坐着, 我脸上有光, 您ノ

(艺): 坐一坐, 有您在我这儿坐坐, 我脸上有光ノ(P55、l25)

2. déngdengr 等等兒

王利发: 喂, 您等等兒, 欸ノ我说, 等等兒ノ

(艺): 您等等ノ(P90、l24)

王利发: 三爷, 等等兒吧ノ

(艺): 三爷, 等一等吧ノ(P106、l11)

明师傅: 你等等兒ノ坑我两桌家伙, 我还有把切菜刀呢ノ喂, 你等等兒ノ

(艺): 你等等ノ坑我两桌家伙, 我还有把切菜刀呢ノ(P145、l11)

「北京音系小轍編」(張洵如編著、開明書店民国38年2月初版)の捲舌韻之功用21頁、表示時間短(均動詞)の項に「紅樓夢」より、「等等兒」 躺躺兒 “醒醒兒” “坐坐兒” を「兒女英雄傳」より、「躲躲兒” “歇歇兒” をとりあげそれぞれ例文を付してある。以下はその“坐坐兒” と “等等兒” の例文である。

坐坐兒: 你坐坐兒可是正該歇歇兒去了(「紅樓夢」82回)

等等兒: 且略等等兒我出来了(「紅樓夢」71回)

「中国語歴史文法」(太田辰夫著、朋友書店、昭和56年7月)に時代的変遷の考察や、“A-A兒” の重疊の際の《一》の研究と共に、“告” “睡” “救” “候” “頑” などの動詞を重疊を示しておられる。なかで、“坐坐兒” の例を全瓶梅詞話から求めておられる。

“哥去到那裏略坐坐兒就來也罷”

II “ABAB兒”(二音節動詞の重疊プラス兒化尾音)

1. huódòng huódòngr 活动活动儿
王利发：走，走，走，出去活动活动儿ノ
（艺）：走ノ外边活动活动去ノ（P58、14）

王利发：你出去活动活动儿ノ
（艺）：出去活动活动ノ（P108、11）

「中国語歴史文法」には、「A B A B型の動詞重複形式はA A型(b)に同じ短時態で、ただがんらい2音節のものを重複させたにとどまる。その成立の過程や時期はA A型(b)に同じであるが《兒》をとることはない。」とあり、「中國話的文法」(趙元任著、丁邦新訳、中文大学出版社、1980年12月)に「注意嘗試式重疊語如果是動作動詞，就不能隨便加上「兒」字。例如、「坐坐兒」、「歇歇兒」可以有「兒」，但是「跳跳」、「跑跑」就不能加「兒」。』とあって、A B A B についての記述はなされていない。だから“活动活动儿”は比較的新しい現象といえよう。

Ⅲ “A A兒” (単音節形容詞の重疊プラス兒化尾音)

1. yuǎnyuǎnr 远远兒
康順子：你躲我远远兒的ノ
（艺）：你躲我远远的ノ

「國語辭典」(中国大辭典編纂處：台湾商務印書館、民国二十六年三月)に「遠」の項には㊦U^{ㄩㄢˇ}yuǎn とあるが語釈がなく、例語もない。しかし第四声は存在したのである。庞家とは一刀兩断、縁を切りたい康順子は庞四奶奶を忌み嫌い、遠くへ遠ざけたいあまりに語氣が鋭くなり四声に発音されたのであろうか。“yuǎnyuǎnr de”ではいかにも軽そうではあるが。

Ⅳ “A A兒” (単音節副詞の重疊プラス兒化尾音)

1. zhēnzhēnr 真真兒
王利发：这，我听得真真兒的ノ
（艺）：听得真真的ノ（P134、124）

「岩波中国語辭典」(倉石武四郎著、岩波書店、1963年)に、zhēnzhēnr〔形〕(音や匂いなど)ははっきりしている。wǒtīngde zhēnzhēnr de (我听得真真兒的) = ぼくははっきりと聞きとった。

「中日大辭典」(愛知大学中日大辭典編纂處、大修館書店、1968年)に〔真真兒〕zhēnzhēnr 確かに、確実に。〔我听得～的、一定是枪声〕わたしははっきり聞いたのだ、確かに銃声だ。とある。

以上ローマ字おこしより得られた、A A兒、A B A B兒の形式による特異な例を紹介した。尚、“好好兒”や“邇邇兒”などもあるが、ここでは省略した。

(大東文化大学)

老舍資料近刊(4)

1984年追加(3)

- 29 胡絮青「忆老舍——纪念老舍诞辰八十五周年述怀」 人民政协报 3月14日；『散记老舍』 p.103
30 胡絮青「老舍是属于人民的」 3月15日 于老舍八十五周年诞辰纪念会上；『散记老舍』 p.104~105
31 李荣峰「从《多鼠斋杂谈》看抗战后期的老舍」 重庆师院学报 3期 9月15日 p.36~38
32 邵煌「武汉抗战文艺活动纪事(1937,7-1938,10) 重庆师院学报 3期 9月15日 p.39~47

1985年追加(3)

- 31 赵遐秋·曾庆端编「第4节 “要看真的社会与人生”的老舍 『中国现代小说史(下)』 中国人民大学出版社 7月 p.273~295
32 同上「第5节 “抛开幽默”的笔尖滴出了血泪」 同上 p.295~311
33 王惠云「论老舍三十年代杂文创作的特色」 河北师院学报 3期 7月

- 34 宋永毅「《四世同堂》的深刻性在哪里」
解放日报 8月20日
- 35 鲁风「《四世同堂》的结尾」羊城晚报
8月27日
- 36 胡絮青·王行之『老舍剧作全集第4集』
中国戏剧出版社 8月 p.1~716
- 37 王行之「老舍著作年表简编」同上 p.5
97~664
- 38 蔚林「老舍剧作评论文章目录」同上 p.
665~697
- 39 克莹「老舍剧作(话剧)首次演出情况」
同上 p.698~710
- 40 舒济「老舍剧作国外译本和演出情况」同
上 p.711~714
- 41 胡絮青「编后记(1982年2月3日)」
同上 p.715~716
- 42 冉忆桥「论老舍的抗战戏剧」华东师范大
学学报 4期 8月
- 43 王栋「文艺界尽责的小卒——论老舍对新
曲艺的贡献」曲艺 8期
- 44 邓惠「透过《八方风雨》看《四世同堂》
——略谈作家的时代责任感」天津日报 9
月6日
- 45 「老舍一首诗 嵌进八人名(摘自《经济生
活报》)」人民日报(海) 12月25日 8版
- 46 苏光文『抗战文学概观』西南师范大学出
版社 12月 p.1~221
- 47 孙均政「老舍作品的语言」『作家文学报
告集』书目文献出版社 12月 p.17~
29
- 48 「附1:老舍夫人胡絮青与读者见面」同
上 p.30~31
- 49 「附2:老舍简介」同上 p.32~34
- 50 「附3:北京图书馆馆藏 老舍部分著作目
录」同上 p.35~45
- 51 赵景深「我所认识的老舍(《艺术世界》80
年1期)」『文坛回忆』重庆出版社 12月
p.69~78
- 52 赵景深「老舍(《文人印象》北新书局19
46年)」同上 p.107~108
- 53 马国亮「良友忆蓑录 50 老舍先生」
良友 12月
- 54 舒乙「再谈老舍先生与满族文学」满族研
究 创刊号
- 55 江华藻·陈远征·曹毓生主编「老舍的戏剧
」『中国当代文学简史』湖南人民出版社
85年 p.361~372
- 56 平松圭子「老舍の《茶馆》について」放
送大学研究年報 第3号 85年 p.17~
23
- 57 李颖「小福子形象分析」河北成人教育学
院函授教材刊登 85年 p.77~79

1986年追加

- 1 马国亮「良友忆蓑录 51 老舍的一封信
」良友 20期 1月 p.40
- 2 周庆基·史景树·朱奕「为祥子写传」『
新文学旧事丛话』上海教育出版社 1月
p.82~86
- 3 克莹·洪忠煌「以小说笔法写话剧——老舍
在抗战剧作中的艺术探索」抗战文艺研究
1期 2月15日 p.7~10
- 4 向野「舒立画猫」北京日报 2月25日
5版
- 5 岡部謙治「〔資料〕老舍『茶馆』舞台上演
録音テープの“拼音文字”化資料——その1
」語学教育研究論叢 3号 2月28日
p.129~167
- 6 高速「《四世同堂》受奖当之无愧」北京
日报 3月1日 3版
- 7 杨「苏叔阳再现老舍形象」同上 2版
- 8 顾曲郎「话剧《国家至上》首次上演」同
上 3月26日 2版
- 9 克莹「人民艺术家老舍」『中国话剧艺术
家传 第2辑』文化艺术出版社 3月 p.
50~95
- 10 衣谷「《茶馆》在香港演出」良友 22
期 3月 p.84~85
- 11 李犁耘「老舍在北京的足迹(连载)」燕都
2·3·4期 4·6·8月各4日 p.34~
37, p.29~31, p.24~26, 28
- 12 王行之「第三次老舍学术讨论会在京举行」
人民日报 4月7日;新华文摘 6月

- 13 彭俐「市委市府嘉奖《四世同堂》剧组」
北京日报 4月13日 1版
- 14 李光「市委市府嘉奖《四世同堂》剧组林
汝为荣获北京市劳动模范称号」北京晚报
4月13日 1版
- 15 苏光文『抗战文学纪程』西南师范大学出
版社 4月 p.1~290
- 16 舒悦译注「老舍在伦敦的档案材料」中国
现代文学研究丛刊 1期 4月 p.115~
124
- 17 舒乙「一对“孪生”小说」同上 p.125
~137
- 18 李犁耘「老舍早期对文学特性的思考」同
上 p.138~147
- 19 (端典)马悦然著舒悦译「“我不是曹禺，
我是老舍，且不一一。”」同上 p.148
~150

1986年(2)

- 56 「老舍專題討論會論文大綱選」大公報
5月1日 6張
- 57 王行之「内地老舍研究近况」同上
- 58 趙園「老舍與中国現代『都市文学』」同上
- 59 吳小美「現代性與傳統性的交戰——論老舍
的雙向文明批評」同上
- 60 程祥徽「老舍作品的語言風格」同上
- 61 藤井榮三郎「縱觀老舍小說」同上
- 62 魏铮「幽州书屋搭桥北京作家与读者见面」
北京晚报 5月5日 4版
- 63 任宝贤「茶馆轰动香港」同上 5月6日
4版
- 64 雷「中国儿童艺术剧院 排练老舍儿童剧《
宝船》」同上
- 65 「兒藝排練老舍兒童劇《寶船》」人民日
報(海) 5月8日 4版
- 66 蔡叔齊·熊昌義「“天上人間永不休止的樂
曲”——《茶館》在溫哥華首場演出散記」
人民日報(海) 5月10日 6版
- 67 藝「北京人藝《茶館》赴溫哥華」同上
7版

- 68 王行之(李之蕙)「在第三次全国老舍学术
讨论会上」文学评论 3期 5月15日
p.143~144, 128
- 69 杨中「忧患的时代 忧患的文学——谈谈《
大地龙蛇》的观念及其“观念化”」抗战文艺
研究 2期 5月15日 p.44~50
- 70 张必忠「根治龙须沟工程开工」北京日报
5月16日 2版
- 71 高放「五个荣获电视『金鹰奖』的北京人—
李维康、游本昌、张桂兰、许亚军、李婉芬」
北京晚报 5月19日 4版
- 72 赵家璧「老舍和我(上)(下)」新文学史料
2·3期 5月22日·8月22日 p.116
~137· p.93~112
- 73 肖伯青「老舍在武汉、重庆」同上 2期
p.138~146
- 74 王松声「老舍在北京市文联」同上 p.1
47~152
- 75 舒济「老舍年谱简编」同上 p.153~
163
- 76 胡絮青「郝寿臣与老舍」北京晚报 5月
29日 3版
- 77 胡絮青·舒乙『散记老舍』北京十月文艺
出版社 5月 p.1~292
- 78 片山智行「中国现代文学在日本」人民日
报 5月28日 8版
- 79 「電視劇“飛天獎”評選揭曉 老舍小說改
編《四世同堂》獲特別獎」人民日報(海)
6月6日 4版
- 80 朱漪「老舍先生与《宝船》」北京晚报
6月9日 3版
- 81 鲁升「老舍笔下的北京端午节」同上 6
月11日 3版
- 82 黄祖培「《寶船》即將“啓航”」人民日報
(海) 6月13日 7版
- 83 吴迺「新发现的老舍的剧本」北京晚报
6月16日 3版
- 84 甄慶如「蘇叔陽與《太平湖》」人民日報
(海) 6月27日 7版
- 85 張家新「翠閣花香勤著書——訪著名女作家
趙清閣」同上 6月30日 7版
- 86 「老舍研究会會報 第5号」6月30日

- 平松圭子「第三次老舍學術討論會」 p.1~2
- 杉本達夫「感想」 p.2
- 小林康則「第三次老舍學術討論會參加日誌」 p.2~5
- 藤井栄三郎「香港『老舍專題討論會』に参加して」 p.5~7
- 剛振華「老舍と盲老人」 p.7~10
- 金森由美子「老舍幽默詩文集——『不遠千里而來』と二、三の作品」 p.10~14
- 「老舍資料近刊(3)」 p.14~17
- 「事務局だより」 p.17~18
- 87 「中国老舍研究会通讯 第2期(全国第三次老舍学术讨论会材料专辑)」 6月 p.1~15
- 北京市副市长陈昊苏·中国作家协会副主席冯牧·中国社会科学院文学研究所所长刘再复「在全国第三次老舍学术讨论会上的讲话」 p.1~4
- 胡絮青「在第三次老舍学术讨论会闭幕式上的讲话」 p.5
- 中国老舍研究会「全国第三次老舍学术讨论会回视」 p.5~8
- 王小鲁「老舍的魅力——全国第三次老舍学术讨论会花絮」 p.9~10
- 沈振煌「观感与启示」 p.10~12
- 「全国第三次老舍学术讨论会部分与会者谈对会议的印象」 p.12~13
- 「中国老舍研究会理事会决议」 p.13
- 「全国第三次老舍学术讨论会论文题目」 p.13~15
- 88 舒乙「老舍的爱好——纪念老舍先生逝世二十周年 1. 打拳」 人民日报(海) 7月2·3日 7版
- 「2. 唱戲」 7月4·5日 7版
- 「3. 養花」 7月7·8日 7版
- 「4. 说相声」 7月9·10日 7版
- 「5. 愛畫」 7月11·12日 7版
- 「6. 玩骨牌」 7月15·16日 7版
- 「7. 和孩子交朋友」 7月17·18日
- 「8. 下小館」 7月22·23日 7版
- 「9. 念外文」 7月24·25日 7版
- 「10. 寫字」 7月29·30日 7版
- 「11. 養猫」 7月31日·8月2日 7版
- 「12. 旅游」 8月5·6日 7版
- 89 关山复「忆老舍和罗常培两先生」 满族文学 4期 7月5日 p.7
- 90 舒乙「身后的“热”」 同上 p.58~63, 24
- 91 周瑞祥·任宝贤「《茶馆》在新加坡、加拿大」 北京晚报 7月7日 4版
- 92 资华筠「观《宝船》随感」 北京日报 7月8日 5版
- 93 止一「老舍论『洋八股』」 北京晚报 7月12日 7版
- 94 「儿艺赴香港演出《宝船》」 北京日报 7月17日 2版
- 95 「中国儿艺《宝船》剧组 将赴港参加国际剧艺术节」 北京晚报 7月17日 4版
- 96 杜广义·吕琬「刻划老舍谢世前几天的心态 苏叔阳新剧作《太平湖》研讨会在京举行」 同上
- 97 世保「北京作协《新剧本》杂志 讨论苏叔阳新作话剧《太平湖》」 北京日报 7月21日 2版
- 98 赵大年「老舍的一家人」 花城 4期 7月25日 p.197~207; 北京日报 8月29·30·31日·9月1·2日 4版; 新华文摘 11月 p.181~188
- 99 舒真「在温哥华看《茶馆》——随《茶馆》演出团访加散记」 北京日报 7月27日 4版
- 100 「蘇叔陽寫老舍」 人民日報(海) 7月27日 4版
- 101 老舍「老张的哲学 赵子曰」 人民文学出版社 7月 p.1~395
- 102 钱祖惠「市文化局召开本年度新剧作讨论会 《换剑记》《太平湖》等剧本受好评」 北京晚报 8月7日 4版
- 103 「上海发现老舍与人合作的长篇佚稿」 北京日报 8月10日 4版
- 104 「老舍佚稿《天书代存》被发现」 人民日报(海) 8月11日 4版
- 105 「老舍小说选稿《天书代存》在上海发现」

- 光明日报 8月12日; 新华文摘 10月
- 106 本刊编辑部「纪念老舍 研究老舍」 民族文学研究 4期 8月15日 p.6~7
- 107 孙玉石「老舍的艺术地位与现代文学史观念的更新」 同上 p.8~16
- 108 孟琮「北京人 北京事 北京话 — 论老舍作品的北京风格」 同上 p.17~24
- 109 周关东「谈谈老舍作品中的系列性人物形象」 同上 p.25~
- 110 宋永毅「老舍研究的人文心理构想」 同上 p.31~34
- 111 伊藤敬一「《微神》小论」 同上 p.35~41
- 112 张林琪·白瑜「宁折不弯 — 追忆老舍死前的一幕」 文汇报 8月20日 3版
- 113 「“老舍自殺の前日” 赤裸々に — 上海紙が目撃手記(共同)」 毎日新聞 8月22日
- 114 「北京成立老舍研究会」 人民日報(海) 8月23日 4版
- 115 「北京市老舍研究会成立」 北京晚报 8月23日 1版
- 116 钩「纪念老舍先生签名售书活动明日举行」 同上 5版
- 117 苏叔阳「太平湖(无泪的长歌)」 光明日报 8月24日~9月18日(24回); 新华文摘 11月号 p.83~101
- 118 鲁青「老舍的一篇『捧词』」 北京晚报 8月24日 3版
- 119 世保「怀念在『浩劫』中献身的人民艺术家老舍 — 话剧《太平湖》深刻感人」 北京日报 8月27日 1版
- 120 朱述新「老舍罹难廿周年祭」 北京晚报 8月27日 3版
- 121 宁树柏「影片《月牙儿》开拍」 北京日报 8月28日 2版
- 122 胡絮青「北京人藝給我的享受」 人民日報(海) 8月30日 7版
- 123 梁秉坤「“我給你们把着场” 怀念老舍先生」 北京日报 8月30日 5版
- 124 方诚「老舍与吴组缜和幽默诗」 北京晚报 8月30日 7版
- 125 「《月牙儿》开拍」 人民日報(海) 8月31日 4版
- 126 「老舍文集第10卷(残雾·张自忠·面子问题·大地龙蛇·归去来兮·谁先到了重庆)」 人民文学出版社 8月 p.1~535
- 127 舒乙「老舍」 人民出版社 8月 p.1~186
- 128 李犁耘「老舍在北京的足迹」 北京燕山出版社 8月 p.1~102
- 129 胡絮青「序」 同上 卷頭
- 130 「老舍在北京活动简表」 同上 p.82~97
- 131 「舒乙同志的信」 同上 p.98~99
- 132 苏叔阳「老舍之死」 人民文学 8月 p.22~34
- 133 小婕「中国儿艺《宝船》赴港演出」 戏剧报 8月 p.49
- 134 張永和「歷史評判着每一個人 — 話劇《太平湖》紹介」 人民日報(海) 9月4日 7版
- 135 周来「『宝船』开到香港 — 中国儿艺赴港演出小记」 北京晚报 9月5日 4版
- 136 连方「《老舍在北京的足迹》」 北京晚报 9月8日 2版
- 137 张瑞麟「读《老舍儿童文学作品选》 爱, 教育之母」 北京日报 9月10日 3版
- 138 舒乙「“舍予”」 北京文学 9期 9月10日 p.57~61
- 139 曹菲亚「国之瑰宝」 同上 p.62~64
- 140 黄宗洛「贵在通俗」 同上 p.65
- 141 石羽「我演老舍先生的第一台戏 — 《残雾》」 同上 p.66~67.43
- 142 蔡若虹「怀念老舍(七律三首)」 同上 p.67
- 143 王乃在「舒乙与《老舍》」 北京日报 9月19日 3版
- 144 王铭「太平湖」 北京晚报 9月23日 3版
- 145 苏叔阳「太平湖(话剧)」 新剧本 5期, 9月 p.2~23
- 146 谭宗远「《四世同堂》用了配音演员」 北京晚报 10月3日 3版
- 147 胡絮青「从两棵柿树谈起」 燕都 5期 10月4日

- 148 李犁耘「《散记老舍》出版」 北京日报
10月9日 2版
- 149 北京文学编辑部「本刊编辑部、《光明日报》文艺部联合举行老舍创作讨论会」 北京文学 10期 10月10日 p.77~80
- 150 高玉琨「一首启人深思的长歌——读剧本《太平湖》」 光明日报 10月12日
- 151 于破粹「关于老舍先生的一段回忆」 北京日报 10月21日 3版

昭和61年度研究発表会・総会

昭和61年7月19日、名古屋大学文学部において例年のごとく総会ならびに研究発表が行なわれました。研究発表は下記の五氏でした。

倉橋幸彦：老舍作品中における“犠牲”について

平松圭子：〈火葬〉と重慶北碚における老舍の生活

杉本達夫：文協の財政と老舍

藤井栄三郎：老舍のリアリズムとキリスト教

李 玉敬：试从文学欣赏角度谈老舍作品中的北京話

発表の司会には、今泉潤太郎・杉本達夫・中山時子の三氏が当たられました。ひき続いて総会に入り、今鷹真氏を議長に選出の後、会務報告と会計報告を承認しました。会計報告については、これまでの会則に会計監査の条項が欠けていたため、本年度の総会にて改正案を提出することが昨年の総会で決定しております。そこで今回の会計報告は臨時の措置として常任委員の陶山信男氏に監査役を委嘱し、監査報告を作成していただきました。次に会則の不備を正すための会則変更が議題となり、下掲のように議決いたしました。最後の議題は役員の変更で、委員全員が再任されました。新委員の互選により常任委員には従来の方々と、新たに日下恒夫・杉本達夫両氏が選出されました。事務処理上の関係から、これまで常任委員には中部地区在任の委員に担当していただき、連絡委員を兼ねて関東関西から各一名に加わっていただいておりますが、関東関西からはもう一名ずつ常任委

員に入っていたきたいと役員会での要請があり、計11名となりました。また、代表委員には柴垣芳太郎氏が選ばれ、事務局には小林康則・桜井龍彦・坂田新・道家春代が委嘱されました。以上で総会を終了の後、座を改めて懇親会が開かれましたことは例年の通りです。

老舍研究会会則

- 一、本会は老舍研究会と称する。
- 二、本会は老舍に関する多方面からの研究を行い、国内外の学術交流を促進することを目的とする。
- 三、本会は下記の事業を行う。
 1. 会報・会誌等の発行
 2. 総会・講演会・研究発表会等の開催
 3. 中国および内外の関係団体・関係者との交流
 4. その他、前条の目的を達成するために必要と認められる事業
- 四、本会の会員は前条の目的に賛同し事業に協力する者をもって構成する。
- 五、本会には次の役員を置く。

委員
常任委員
会計監査
代表委員

 1. 委員は総会で選出する。
 2. 委員は委員会を構成し、本会の運営について決議する。
 3. 常任委員は委員の中から若干名を互選する。
 4. 常任委員は本会の運営に当る。
 5. 会計監査は常任委員の中から一名を互選する。
 6. 会計監査は経理を監査する。
 7. 代表委員は常任委員の中から一名を互選する。
 8. 代表委員は本会を代表し、事務局を統轄する。
 9. 役員は任期は二年とする。但し再任をさまたげない。
- 六、本会の会計は会費その他をもってこれにあ

てる。会費については別に定める。

附則

一、本会の事務局は当分の間、下記の所におく。

名古屋市千種区不老町 名古屋大学文学部中国文学研究室内

二、事務局は常任委員の委嘱によって構成する。

三、本会会費は当分の間、毎年度三千元とし、学生会員はその半額とする。

四、本会の会計年度は毎年四月一日から翌年三月三十一日までとする。

五、本会則の変更は総会の決議による。

六、本会則は一九八四年三月十七日より発効する。

役員名簿 1986年7月19日選出

〔代表委員〕 柴垣芳太郎

〔常任委員〕 今泉潤太郎・今鷹 真・日下恒夫・柴垣芳太郎・杉本達夫・丁 秀山・平松圭子・藤井栄三郎・渡辺尚子・陶山信男・杉山寛行

〔会計監査〕 陶山信男

〔委員〕 伊地智善継・伊藤敬一・稲葉昭二・今泉潤太郎・今鷹 真・牛島徳次・太田辰夫・日下恒夫・興水 優・柴垣芳太郎・杉山寛行・杉本達夫・陶山信男・立間祥介・丁 秀山・中山時子・服部昌之・平松圭子・藤井栄三郎・宮田一郎・黎波・渡辺尚子

事務局だより

◇昭和61年11月17日、わが国での老舎文学紹介・翻訳・研究の大先達でいらっしやいました竹中伸先生がお亡くなりになりました。先生は本会設立の議が有志の間でもち上りましたおり、進んで発起人の一人として名をつらねていただき、本会成立の後には、ひきつづいて委員に御在任いただきました。かねて本会としても、先生をお迎えして御講演をお願いする

なり、あるいは座談会のような形で、長年にわたる御研究の回顧と、後進の者への導きをお願いしたいと考えておりましたが、御高齢のこともあって、ついになえられることのないまま御逝去の日を迎えることになってしまいました。心よりご冥福をお祈りいたしたいと思ひます。

◇以前に会報第4号の「事務局だより」にて御報告いたしましたように、本会事務局に柴垣芳太郎氏の寄託分を主とする老舎原本コピー等の資料が相当数収蔵されております。名古屋大学中国文学科有志の好意的な申し出によって、会員の要望に応じてコピーサービスができるようになっており、1枚40円にて取りあつかっております。ただし、公費等によるもので、領収書を必要とされる場合は1枚50円となります。資料名、領収書の要否を明記の上、事務局までお申し出下さい。なおまた、本会が会員各位のための老舎資料センターとして、より一層充実した機能を果たすべく、関係資料の収集に努めております。会員ご執筆の関係論著を必ず一部事務局あて御送付いただきますよう重ねてお願い申し上げます。中国で発表されます老舎関係論文等にも注意はいたしておりますが、目の届きにくいものもありますので、随時お知らせ願えれば幸いです。

◇会報本号の編集大綱については、早く常任委員会において決定しておりましたが、その後、種々の事情により思いもよらず遅延をかきねてしまいました。執筆者ならびに会員各位の御諒恕をお願いいたします。

老舎研究会会報第6号 (1987年4月15日)
〒464 名古屋市千種区不老町 名古屋大学文学部中国文学研究室内 老舎研究会事務局
(TEL 052-781-5111 内線2245)